

ゆうこ
新井 祐子さん
(赤見町)

○プロフィール

岐阜県出身で10年前より佐野市在住。東京藝術大学卒業後、ウィーン国立音楽大学大学院に留学。現在は自宅でピアノ教室を開きながら宇都宮共和大学講師も勤め、多くの人に音楽の魅力を伝える活動をしている。



キラリ★
話題の「ひと」

音楽に感謝して

ピアノニストの新井祐子さんは「音楽を通じて、人に元気を与えたい。人の輪をつないでいきたい。みなさんに音楽の素晴らしさを知ってほしい」と音楽に一際熱い気持ちを持っています。

去る10月21日に記念すべき第10回目となる、さのクラシックコンサートが開催され、新井さんが演奏するピアノの音色が多くの観客を魅了しました。「佐野市出身または在住のメンバーで構成されるオーケストラ・アンサンブル佐野と一緒に演奏し、観客のみなさまと一体になったことは感無量でした」新井さん自身、結婚を機に佐野に居住し周囲に知り合いもいない不安な気持ちの中で、今いる多くの仲間に出逢えたのも音楽のおかげと言います。

さらに、新井さんはもう一つ音楽を通じた出逢いのエピソードを話してくれました。それは、留学先ウィーンでのこと。異国での言葉の壁に悩んでいた新井さん。そんな時に現地で出演したコンサートにおいて演奏後、現地の方が「ビューティフル」と称賛の声をかけて新井さんのもとに近づいてきたそうです。その時に、言葉は通じなくても音楽は言葉を超えて

心で通じ合えることを実感したと話されました。

音楽があつたから、今の自分がいると話す新井さん。今後の音楽に対する想いを話していただきました。「今までの人生において音楽は不可欠でした。落ち込んだ時、悩んだ時に音楽が助けてくれました。音楽が色々な出逢いを作ってくれました。その音楽の素晴らしさを特に子どもたちに伝えていきたいです。パソコンや携帯から簡単に音楽に接することができるようですが、子どもたちには是非コンサートなど生の音楽を体感してほしい。作曲家の考えを演奏家の生の音色で感じ取ってもらいたい。私自身もピアノニストとして、子どもたちやファミリー向けのコンサートを開催するなどして音楽を身近に感じる活動をしていきたいと考えています」

音楽の魅力
を伝える
続ける
新井さん
の今
後一層
のご活躍をお
祈り申
し上げます。
(市民記者 飯田瞬)



さのクラシックコンサートの模様

市長からの
メッセージ



駅前広場もイルミネーションに彩られ、早いものでもう一年を振り返る時期になりました。

先月3日には、人間国宝 田村耕一先生誕生100年記念事業として講演会とシンポジウムを開催しました。会場の文化会館小ホールには陶芸ファンや市民など約300人が集まり、田村耕一作品の魅力や卓越した技法、そして人としての魅力について熱心に聞き入っておりました。田村先生の作品は、市役所南の佐野未来館1階「人間国宝 田村耕一陶芸館」で常設展示しておりますので、この生誕100年を機に皆さんも人間国宝の作品を見に来てください。

また、先月6日、文化会館においてオリンピッククメダリスで日本オリンピック委員会副会長の橋本聖子さんを講師に迎え、スポーツ講演会を実施しました。講演では、幼少期から難病を克服してきた体験談やスポーツを通じた人材育成とまちづくりについての話があり、来場者は真剣に聞き入っていました。「スポーツ立市」を推進する本市にとっても大いに参考になりました。

さて、ウインタースポーツも盛んになってきましたが、先月11日、市役所前を発着として市民駅伝が行われました。市内14支部が9区間で力走を繰り広げ、見事、植野支部が2年連続優勝を果たしました。

また、今月の9日には、年末恒例のさのマラソンが行われ、今年も3千人を超えるランナーが本市に集い健脚を競います。現コースでのレースは今年が最後となり、来年は新年号と共にコースも一新されます。平成最後のさのマラソンです。コース周辺の皆さんは是非とも選手に熱い声援をお願いします。

忙しい年末を迎えます。皆さん、体調に気をつけてお過ごしください。

岡部正英





どまんなかフェスタ佐野2018

11月4日(日)、日本列島の“どまんなか”に位置する佐野のイベント「どまんなかフェスタ佐野2018」が、田沼グリーンスポーツセンターにて開催されました。

佐野市の商工農をはじめ、芸能や行政機関まで、佐野のすべてが“どまんなか”に集結！ステージイベントや、グルメ、物産販売、展示など盛りだくさんの内容で、来場した皆さんは秋空のもと、佐野を満喫していたようでした。



迫力の田沼太鼓の演奏



税金クイズに挑戦

人間国宝・田村耕一 27年ぶり注目の特別企画展

佐野市出身の陶芸家・田村耕一の生誕100年を記念して記念事業が各施設で開催されています。なかでも吉澤記念美術館には東京国立近代美術館・栃木県立美術館からの作品と初公開の資料含む合計101点の作品などが並び、これほどまでの展示は1991年県立美術館での開催以来27年ぶりだそうです(12月9日まで)。

展示スペースは3つのコーナーに区切られ、どの空間も田村耕一の魅力的な世界に引き込まれてしまいます。『変幻する陶芸』では40年間(昭和21年~61年)の作品の変遷を紹介しており、「変わり続けた作品の中に確固として変わらない芯があり、そこに田村のオリジナリティーを感じることができます」と学芸員の末武さんがおっしゃっていました。初公開の30代頃の直筆ノートや実際に使っていた道具は、どれも興味深く、生活感や心情を共有することができます。この機会にぜひ足を運んではいかがでしょうか。



作品の変遷を紹介



初公開の直筆ノート



田村が使用していた道具

(市民記者 渡辺まさ代)

昔、蛙の薬草として知られるおおぼこ(車前草)やせき止めの薬としたははこぐさ(母子草)には、どんな方言があるでしょうか。道端などに群がって生えている雑草におおぼこがあります。おおぼこの葉っぱは卵のような形をして、茎には白い小さな花を咲かせます。方言では、これをオンパコゲールツパ・ケールツパなどといいます。おおぼこには薬効(やつこう)があつて、死んで間もない蛙をこの葉で包んだところ、その蛙が息を吹き返したという伝説があります。このことからおおぼこは、「蛙の葉」といわれるようになり、それが訛つて、ゲールツパとかケールツパとなりました。

春の七草(せり・なずな・はこべ・すずな……など)の一種に「ごぎよう」があります。ごぎようは別名「ははこぐさ」ともいいます。昔は薬草ということもあつて、七草がゆにして食べました。母子草は春から夏にかけて、田畑や道端などにたくさん生えています。小さくて黄色い花を咲かせます。かつて母子草の若い茎や葉は草餅にして食べました。葉っぱには白い毛(綿毛)があり、それが乳児の舌に似ていることから、母子草という名がついたといわれています。母子草を、方言でネバリモチといいます。これを切ると、切り口から白いねばねばした液が出てくるからです。草餅の「草」といえば、普通よもぎをいいますが、このよもぎが草餅に使われる以前は、母子草が用いられたといわれています。

(市民記者 森下喜一)

佐野台
ばんてい

母子草は草餅にいれる雑草だった

今回の表紙 「第14回佐野市民駅伝競走大会」平成30年11月11日撮影